

新聞——『モーニング・ポスト』と

サミュエル・テイラー・コールリッジ 藤卷明

ロマン主義時代までのイギリスの定期刊行物 定期刊行物ジャーナリズムの一つである新聞は、チューダー王朝支配下の十六世紀末に、ニュースを集めた小冊子という形態で創始されたが、日刊紙、地方紙、日曜版などが発行され始めて、質的にも量的にも本格的に新聞が発展するのは十八世紀になってからである。雑誌は十八世紀初頭にその萌芽となる文学的読み物『タトラー』*The Tatler*、『スペクテイター』*The Spectator*などが人気を博したが、一号に一つだけのエッセイを載せ、主催者であるジョゼフ・アディソン *Joseph Addison* (一六七二—一七一九) やリチャード・ステイール *Richard Steele* (一六七二—一七二九) とその協力者たちだけで出版する個人刊行物の色彩が強かった。

*1 イギリスの新聞黎明期からロマン主義時代までの状況については、ルイズ・クレイヴン *Louise Craven*、ジェレミー・ブラック *Jeremy Black* 小池銈を参照。

やがて、一八三一年に初めて雑誌 Magazine の名を冠した『紳士の雑誌』*The Gentlemen's Magazine* が創刊されると、この世紀半ばには書評雑誌が相次いで刊行され始め、世紀が変わって一八〇二年に創刊された『エディンバラ評論』*The Edinburgh Review* は、多くの書き手を動員して、幅広い題材を扱い、高い原稿料を支払って、文学的に高い水準を維持することに努め、現代の雑誌の原型を確立した。^{*2}

とはいえ、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてイギリスの首都ロンドンで最も売れていた日刊新聞『モーニング・ポスト』*The Morning Post* でさえ、売れ行きは一日せいぜい千部単位、一八〇二年に三五〇〇部程度であり、二位の新聞を七〇〇部から一〇〇〇部引き離していたとはいえ、現代の新聞の発行部数とは比較にならない。^{*3} 発行部数だけでなく、一部あたりの活字数という情報量の面でも、現在の新聞と比べるとはるかに少ない。図版 1 に挙げたように、一枚の紙を二つ折りにして、裏表に印刷して総計わずかに四ページ、一ページは四つのコラムからなる。大きさは、ブロードシートと呼ばれる高級紙一ページの大きさ、縦六一センチ、横三八センチよりもやや小さく、縦約四九センチ、横約三二センチである。^{*4}

しかも、紙数が限られているだけでなく、広告の占めている割合が大きい。号によって、また時代によっても違いはあるが、一面のほとんど及び最終四面の一つから三つ

*2 十八世紀イギリスの雑誌状況については、*The Norton Anthology English Literature: The Major Authors Sixth Edition* 832 を参照。

*3 数字は『同時代論集』*Essays on His Times* lx による。因みに、その編者 David V. Erdman が、『モーニング・ポスト』に関して信用のおける情報はほとんど含んでいないと断定している Wilfred Handie 82 によれば、一八〇三年に四五〇〇部で、発行部数第二位の *The Morning Chronicle* が三〇〇〇部だったという。

*4 『インディペンデント』*The Independent* が、他紙に先がけて大衆向け新聞と同じタブロイド版で発行し始めたの

のコラムが広告であり、だいたい四分の一から三分の一、多い時で半分近くを占めている。広告の内容は、劇場、展覧会、富くじ販売、クラブの集会告知、個人教授、健康相談、書籍、債権者の集会告知、馬と馬車、家具などの競売告知、不動産の賃貸など、読者層が限られていたことを反映して、中産上流以上の階級でないと手が出ないような商品、サービスがほとんどである。残りが、追悼、政治、軍関係、社交界つまり貴族社会の消息記事、議会における演説の筆記などに割かれている。また、現代の論説記事のような、主力記者が力をこめて時事問題について書いた一コラム以上にあたる長めの文章もあった。このように、情報量は現在と比べてはるかに少ないとはいえず、既に広告が大きな比重を占めている点でも、ニュースの対象が多岐に渡る点でも、現在の新聞形態の基礎が形作られていたことは間違いない。

雑誌においては、書評誌 *Review* (季刊。重要な書物の書評と時事問題の議論が中心) と雑誌 *Magazine* (月刊。中身は雑多で、書き下ろしのエッセイ、詩、物語などの比率が高く、どちらかと言えば娯楽色が強い) の二系統が続々と創刊され、互いに競い合った。『季刊評論』*The Quarterly Review* (一八〇九年創刊)、『ブラックウッドの雑誌』*Blackwood's Magazine* (一八一七年創刊)、『ロンドン雑誌』*The London Magazine* (一八二〇年創刊)などが名高い。十八世紀の雑誌記事は有閑階級向けで、その階級で流行している出来事に限られていたのに

を皮切りに、ここ数年でイギリスでは高級紙独自のサイズは日曜版を除いて次第に姿を消しつつある。

図版 1-1 『モーニング・ポスト』一七九八年四月十六日号（一面）

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

一面のタイトルから、この新聞の当時の正式名称が *The Morning Post and Gazetteer* だったことが分かる。これ以前には *Gazetteer*（記者）の代わりに *Fashionable World*（社交界）という副題がついていたこともあった。次行の最初に通巻の号数、発行年月日と曜日、最後に値段が記されている。面白いのは値段の書き方で、一七八三年の値段は 3d（d は古代ローマの貨幣単位 *denarius* の省略形で、*penny, pence* の略字として使われた）つまり正味三ペンスだったのに、首相の小ピット（後述）による印紙税のために三ペンス余分にかかっているという内訳を、わざわざ明らかにしていることである。この新聞が少なくともこの当時は、反政府的な立場を鮮明にしていた事情がここからも窺われる。

なお、この号は『モーニング・ポスト』の中でもきわめて広告が多い部類に入り、一面のすべてと四面の終わりから三コラムすべて、一コラム目の八割程度がそれにあたり、全体で半分近くになっている。

図版 1-2 『モーニング・ポスト』一七九八年四月十六日号(二面)

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

記事は二面から始まっていて、一コラム目は、軍人の書いた公の書簡五通によるイギリス海軍省の消息の後に、倒産情報がある。二コラム目は六割ほどがハンブルク、ハーグ、ダブリンなど海外の新聞からの情報、残りがピット内閣関係の消息。三コラム目は簡単なオペラ評と、皇太子ほか社交界の著名人の消息。これは新聞のかつての副題が *Fashionable World* だったことを想起させる。四コラム目から三面の最初にかけて、コールリッジの代表作の一つ「フランス頌」*France: An Ode* (後出の代表作一覧表 8 参照) として知られることになる詩「取り消し頌」*The Recantation: An Ode* が掲載されている。V 連にある*は省略があることを示す。

図版 1-3 『モーニング・ポスト』一七九八年四月十六日号(三面)

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

三面の一コラム目はコールリッジの詩の続きと、ヨーロッパ大陸の戦時情勢、偽造による逮捕の記事、軍事情報、うっかりして物乞いに多すぎる硬貨を恵んだのに気づいてそれを取り戻した貧しい老婆の話など現在で言う三面記事的な内容になっている。二コラム目から三コラム目の三分の一までが再びアイルランド情報、何件かの海軍情報、脱獄囚、火事、ヨット競争の結果など雑多な記事が続く。四コラム目の最初には、国家の危機の折、義勇軍に進んで入りたいという、この新聞の当時の反政府的な姿勢には必ずしもそぐわないような読者からの投稿記事が挟み込まれている。続いてニューマーケットの競馬情報、残りは再び社交界の消息となる。同種の記事が複数箇所に渡るなど、紙面構成は現在に比べると相当場当たりに思われる。なお、値段の箇所では触れた印紙税は、この面の右下欄外にある印を三ペンス支払って押してもらった用紙以外では発行を許さないという形で課されていた。値段の半分に相当する重税は言論統制の一環である。印紙税については小池銈七九一八〇を参照。

図版 1-4 『モーニング・ポスト』一七九八年四月十六日号(四面)

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

四面の最初は記事のように見えるが、よく読むと咳止めドロップの宣伝だと分かる。続いて社交界の出生、結婚、死亡の情報、株式市況で、残りもすべて広告である。現代の紙面構成の感覚では、二つ折りにした表側に当たる一面と四面という一番目立つ場所を広告が大きな顔で占めているのは不思議な感じもするが、人目につくのが宣伝の仕事と考えれば合理的とも言える。あるいは、新聞の生命である記事は織り込まれた内側に大事にしまつて、埃や汚れから保護すると同時に、楽しみは紙面を見開いた後に残しておくという配慮がなされたのかもしれない。Black 13にも指摘されているように、本文、広告とも挿絵や地図がないことが現代と異なる特徴である。内容的には滑稽記事もあるのに、字だけの紙面のため硬い印象を与えている。

一番下にこの新聞がロンドンのストランドにあるサマセット・ハウスのC・スミス氏によって印刷され、広告と編集者への手紙の取次ぎもそこでする旨の情報が添えられている。広告の占める比率は高く、収入上も重要だったので、その申し込み場所を毎日明らかにしておく必要があったからである。新聞広告への需要は、十八世紀を通じて拡大していた。

対し、題材は大きく広がって、中産階級の身の回りのことにまで目が向けられるようになった。^{*5}

イギリス・ロマン主義文学とジャーナリズム そのようにして隆盛に向かっていたジャーナリズムと、この時代に中心的な役割を果すロマン主義文学者たちは、多かれ少なかれつながりを持っていた。自作詩をまず新聞や雑誌に掲載してもらって作家としての頭角を表わし、やがて作品集を出版すると書評誌から叩かれて、それに反発しつつさらに新しい書き物をするというような形で、ジャーナリズムを作家としての自己形成の場所にしていったのである。なかには雑誌記事によって糊口を凌ぐ作家も出てくる。イギリス・ロマン主義作家のうち、ジャーナリズムとの関係が最も深かったのはサミュエル・テイラー・コールリッジ Samuel Taylor Coleridge (一七七二—一八三四) である。若くして詩を書き始め、自作詩集をいくつか刊行後、二十六歳になる直前にウィリアム・ワーズワス William Wordsworth (一七七〇—一八五〇) とともに匿名で『抒情的歌謡集』 *Lyrical Ballads* を出版し、これは後にイギリス・ロマン主義の夜明けを告げる作品と呼ばれることになったものの、それからわずか四年後、三十歳にして自分の詩的才能の枯渇を嘆いて自ら詩を封印し、批評、ドイツ哲学などに転向した。そうした経

*5 ロマン主義時代のイギリスの雑誌状況については、*The Norton Anthology English Literature: The Major Authors Sixth Edition* 1273-74を参照。

歴のかたわらで、大学時代にフランス革命の自由と平等の理想に影響を受けて、急進的な政治運動を始め、演説、記事執筆などを行なうと同時に、自ら定期刊行物の発行を二度も企画して実際に自家出版したほか、イギリス一の発行部数を誇る『モーニング・ポスト』に、詩だけでなく、政治的な論説をも盛んに寄稿して、世論を導こうとしたジャーナリストとしての側面があった。

このように多彩な活動を送ったことが却って災いしたのか、これまでのコールリッジに関する研究を振り返ると、研究者たちは個々の活動領域に関心を示しても、それぞれを比較対照して、総合的に作家活動を見ようとする努力に欠けているように思われる。つまり、詩を研究する人はジャーナリズム活動を顧みず、政治思想に関心を持つ人は詩を閑却するという傾向がある。とりわけ、日本のコールリッジ研究では、ジャーナリストとしての側面が見落とされている。しかし、若い頃の主要な活動であったジャーナリズムの仕事を視野に入れて、同時進行していた詩人としての活動を考察してみると、詩以外の側面を捨象して捉えていた場合とは、また違った作家像が浮かび上がってくるはずである。現在、詩人の代表作として広く読まれている文献は、文学史のなかで、ある種の選別が行なわれて正典として確立した資料である。本稿では詩人が寄稿した記事の精読にまでは踏み込まず、そのジャーナリズム活動を概観する

にとどめつつ、正典的な詩以外の、選別の結果読まれなくなった資料を傍らに置くことで、正典の詩を読んだ時に浮かび上がる新たな解釈、さらには新たな詩人像構築の可能性、および今後の課題について論じたい。それがさらに広く深く、イギリス・ロマン主義と当時の定期刊行物の関係を見渡すきっかけになることを願って。

トマス・ド・クインシーの予言　コールリッジよりも十三年遅れて、マンチェスターに生まれたトマス・ド・クインシー Thomas De Quincey (一七八五—一八五九) は、すでに触れたワーズワスとコールリッジの共作詩集に早くから感動して、二人の詩人が住む湖水地方を訪れ、一八〇九年、ワーズワス一家が手狭になって手放したコテジに入居し、自らも湖水地方の住人となる。そこで詩人たちと隣人づきあいをしながら、その日常生活を間近に観察した。まもなく詩人たち、なかでもワーズワスとの仲は冷却するものの、ド・クインシーは湖水地方に住み続け、時を経た一八二一年、雑誌『ロンドン・マガジン』に自らの阿片中毒体験記『英吉利阿片服用者の告白』 *Confessions of an English Opium-Eater* を連載、これが大好評を博し、作家として認められた。そのド・クインシーが一八三四年コールリッジの死をきっかけに、雑誌『テイツ・エジンバラ・マガジン』 *Tait's Edinburgh Magazine* に四度に渡って寄稿した追悼記事は、しかしながら、

いわくつきのものである。なぜならこの記事には、コールリッジの盗作癖への攻撃や家庭内の不和など、故人への否定的な言及が数多く含まれ、誹謗中傷の書として遺族周辺の怒りを買ったからである。

しかし、だからといって徹頭徹尾、コールリッジを叩き続けているわけではない。たとえば蔵書欄外への書き込み (marginia) の重要性をいち早く見抜いて、それがいざれ、まとめられる日が来ると予言した。後年、これはポリンゲン版コールリッジ全集に『欄外書き込み集』六巻が組み入れられたことで実現している。そうした批評家としての慧眼を示すもう一つの例が、コールリッジのジャーナリズム活動にまつわる次の一節である。

確かに、コールリッジは、日刊ジャーナリズムに関係したほかの誰よりも一目置くに値する人物だった。莫大な数に上る素晴らしい見解が、あの広大な深淵のなかに埋葬されており、発掘や復元をされて人々の称讃を浴びる可能性もないままに眠っている。海と同じように、その世界には無限の財宝が飲み込まれて、潜水鐘を被った潜水夫によって引き上げられて再び日の目を見ることもない。しかし、岸辺なき海のごとく無辺際に広がる豊かな富の詰まったどの雑誌に当たったところで、

コールリッジの政治的論説ほど、真珠の養殖場が長いあいだに蓄積されたごみや「purgamenta」「塵芥」としたまぜになつてゐる場所はほかにない。コールリッジを偲んで誰が見ても分かる記念碑を建てるとすれば、『モーニング・ポスト』に載つた評論の再刊に勝るものはないが、その後の『クーリア』に発表された評論はそれを更に凌いでいる。^{*}

最大の成果が海の底に眠つてゐるとの箇所に潜む皮肉を差し引いても、やはりこれは相当の誉め言葉である。このような文言があつたからこそ、遺族の間で評判の悪かつたこの追悼記事について、コールリッジの娘セアラが、ド・クインシーは「偉大なる雄弁と鑑識眼」*great eloquence and discrimination*を備え、「批評の対象となる人物への内なる共感を十分に」*sufficient inward sympathy with the subject of his criticism*宿^{*}してゐると弁護したのだと思われる。

コールリッジ自身のジャーナリズム観 コールリッジ本人はジャーナリズムの現場に身を置きながら、自らの活動をどのように捉えていたのだろうか。十八世紀の終わりにから十九世紀の初めにかけて、コールリッジは先述の、最もよく売られていた日刊新聞

*6 『トマス・ド・クインシー著作集IV 湖水地方と湖畔詩人の思い出』六八―六九頁。原文は *De Quincey* 76 参照。

*7 『トマス・ド・クインシー著作集IV 湖水地方と湖畔詩人の思い出』六七―四一七五頁。原文は *De Quincey* 15 参照。

『モーニング・ポスト』に盛んに寄稿していた。社主のダニエル・スチュアート David Stuart (一七六六—一八四六) から、共同経営者になって新聞稼業に専念する気はないかと持ちかけられていた一八〇〇年、コールリッジはジャーナリズムで書くことについて、私的な手紙でたびたび触れている。「新聞の記事を書くわれわれはほかならぬガレー船の奴隷である——事件の強風が音を立てて頻繁に吹き渡っている時には、帆を高く掲げるだけですみ、船は勝手に先へ進んで行く——風が凧いで日照りが続くと、われわれが櫓を漕ぐ番が来る。」^{*8}このように、事件という風に翻弄されて生きるジャーナリストの不安定さをこぼす一方で、同じ手紙のこれに続く一節で、夜の十二時に書いた記事が、それから十二時間もたたないうちに、五、六千人の読者に読まれ、それが人の口の端に上るだけでなく、議会の庶民院の討論でもそのままの言い回しで使われるのを耳にすると、自分のプライドがくすぐられる、と才能ある書き手に開かれてある大きな可能性についてもはっきりと認識している。それでもやはり、仕事の辛さの方が、職業としての可能性への期待を上回ったようである。議会の討論の記事にするために、ある時は二十五時間も、別の日には朝十時から翌朝の四時まで議会の傍聴をしたと漏らしており、やがて別の手紙で、社主スチュアートの誘いについては、二千ポンドの二千倍積まれても、私はこの気ままな読書生活を手放すつもりはない、

*8 一八〇〇年二月四日付書簡。原文は *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* I 569 を参照。以下、英文の日本語訳は全て本稿の筆者による。

と新聞記者専従の道は最終的に断わる決意を記している。^{*9}しかしその後も、年により記事の量に多寡はあるものの、スチュアートのために『モーニング・ポスト』紙に寄稿を続けた。

記者専従の断念を漏らしたのと同じ書簡で、コールリッジは書き物全般を二種類に分類している。「一つは一時的にせよ、直接的かつ広く印象を与える方法——もう一つは永続性を目指す方法——新聞は前者だ——人がなしうる得る最善の仕事は後者だ——本を訳したりするという中間の階級はそのどちらでもない——自分の腰をし、かかり、落ち着かせたら、僕が金のために書くのは新聞だけにするだろう。」寄稿を続けながら、その日その日のために読者を喜ばせる読み物を書き散らして、そのままになつてしまいがちなマス・メディアの短命性を、コールリッジははつきりと意識している。だからこそ、こうして書き散らした記事を何らかの形で一卷にまとめて永続化を図らなければならない、という考えが当然生まれ、その意図をほかならぬスチュアートに漏らしている。「これらの記事を書き終えたら、僕は全部を小冊子の形にして出版できたらいいと思つている／でもこれについては君に判断してもらうのが一番だ。」^{*10}ところが、ほぼ同時期に、別の友人には、それと正反対の自己卑下ともいふべき態度を見せている。「そもそも自分がモーニング・ポストに書いたエッセイを集めるといふ考

*9 議会の傍聴は一八〇〇年二月十二日付書簡、記者専従の誘いは一八〇〇年三月二十一日付書簡。原文は *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* 1569, 582 を参照。ジャーナリストとしてのコールリッジについては、ディアドラ・コールマンが短いながら示唆に富んだまとめを提供している。とりわけコールリッジ自身のジャーナリズム観については Coleman 127-28 から教えられるところが大きかった。

*10 一八〇〇年十月三日頃の書簡。原文は *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* 1627 を参照。

えはない——あの記事にそんな価値はない。」^{*11}

手紙の内容を書く相手によって書き分けているのではないか、という疑念も浮かぶ。しかし、これらの言葉にはむしろ、コールリッジ自身のジャーナリズムに対する二律背反の態度というか、その時々で二つの考えの間を揺れていた心理がはっきり示されていると考える方がよい。近代社会におけるマス・メディアの可能性への期待の一方で、十七世紀革命期の大詩人ジョン・ミルトン(John Milton (一六〇八—一七四四))の後を継ぐような大文学と比べて思い知る、売文家業の卑小性への軽蔑。ともあれ、完全には自分の記事の永続性に自信を持てなかったコールリッジにとって、この時点でド・クインシーの言葉を聞くことができたとしたら、力強い援護射撃と感じられただろう。しかしながら、これは追悼記事でなされた予言である。結果として、コールリッジが他界するまで記事がまとめられることはなかった。

娘セアラとデヴィッド・アードマンによる予言の実現　ド・クインシーによる予言は、詩人の娘セアラ・コールリッジ Sara Coleridge (一八〇二—一八五二) が一八五〇年に三巻本で千ページを越える『同時代論集』*Essays on His Own Times*を編纂したことによって意外に早く実現される。しかし、詳細な解説や註を付けて現代の読者が利用できるように

*11 一八〇〇年九月十七日
付書簡。原文は *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge* 1:623
を参照。

な形で記事が再びまとめられて出版されるのは、時を經た一九七八年まで待たなければならなかった。アメリカのニューヨーク公立図書館を本拠とする学者デヴィッド・V・アードマン David V. Erdman の編纂による『同時代論集』Essays on His Times 三卷が、一九六九年から刊行開始されたボリングゲン版コールリッジ全集の一環として刊行されたのである。この三卷本は、まさしく先の予言に沿って、一七九七年から一八一八年に渡る二十年以上もの間、コールリッジがスチュアートのために断続的に寄稿を続け、た『モーニング・ポスト』と『クーリア』The Courier の二つの新聞に載せた散文記事を集めている。三卷目は作者がコールリッジであると確定できないものの、排除も出来ない記事などと、索引を合わせた巻になっているが、残りの二巻に収められている分だけでも相当の数に上る記事をコールリッジが書いていたことが分かる。

また、アードマンが寄せた一二〇ページに及ぶ序文が、恐ろしく力のこもったもので、多くの情報を凝縮して呈示しようとする余り、決して読者にとって読みやすいとは言えず、細部まで目を光らせていないと肝心な点を見落としてしまうような、謹聴ならぬ謹読を強いるものである。しかしながら、コールリッジの二十年に及ぶ寄稿の変遷と、その時々々の政治状況などを詳細に、しかも大局を見失わずに論じている。アードマンは、赤狩りの非米活動委員会から目をつけられて大学への就職が不可能となり、

ニューヨーク公立図書館に職をもらって、その機関誌を一級の研究誌に仕立て上げたという不屈のロマン主義文学研究者である。その経歴からも予想されるように、政治的な転向の問題に大きな関心を懐きつつ、コールリッジの政治的な記事を検証していったことが、その序文から窺える。アードマンの眼差しは、転向者であるコールリッジに対して思いのほか優しい。フランス革命勃発当初の革命への熱狂的支持から、やがて、政府のお先棒を担ぐ『クーリア』に記事を書くようになったコールリッジも、巷で言われているほど恥知らずな転向を行なったわけではないという調子で、随所に転向を反証する例を上げながら、客観的に評価を行なっているように思われる。

E・P・トムソンの批判 この三巻本の書評を書いたイギリスの有名なマルクス主義歴史家E・P・トムソン E. P. Thompson は、アードマン自身の反骨の経歴とその重厚な序文を最大限に評価する一方で、そこに集められたコールリッジの記事を読む限り、政治思想家としてのコールリッジの評価は極めて低いものとならざるを得ないと断じた。また、転向者としても、以前の同志を非難して、自分のその時の立場を弁ずるのに汲々としているだけの哀れな輩である、と軽蔑の口調を隠さない。わざわざ頭韻を踏んで揶揄の調子を滲ませながら、記事は「コールリッジの常套句の寄せ集め」

‘Coleridge’s Compendium of Cliche’ と名づけた方がよいとさえ提案する。アードマンのように赤狩りに屈して節をまげることのなかつた立派な学者が力を注ぐにはもつたないともで言い、編者の知力を詩人よりも上に置く。トムソンによる最も激しい罵倒は以下の一節である。

もしもコールリッジが自分は完全に間違っていた、しかも、根源的なくつかの点においてそうだったという結論に至ったとするなら、誉れある二つの道筋が目の前に開かれているのが見えてもよかつたはずだ。一つはその問題を徹底的に論じつゝして、自分が過去に忠誠を捧げた対象や同志を戯画化したり、証拠を捏造したりしないという難しい道筋である。これをワーズワスは、八年という年月をかけて『序曲』を書く際に行なつた。もう一つは、暫く沈黙と自己批判の期間を置くことである。しかし、コールリッジは反転するとたちまち、この上なく激しい攻撃に移つて、自分の友人たちの動機に関して意地の悪い非難を投げつけ、自分の自叙伝に広範囲に渡る操作を加え、誰もがかつてはコールリッジ自身の立場だつたと考えていたものを物笑いの種にしたのである。いかなる政治的な判断に基づいても、これは不忠義、自己中心的、全くの無責任であつた。^{*12}

*12 常套句の寄せ集めの箇所も含めて、原文はThompson

148-49を参照。

一九五六年のフルシチョフによるスターリン批判を受けてイギリス共産党を脱党し、真のマルクス主義的伝統に基づく人間の顔をした社会主義を標榜して、一九六〇年代の造反の季節が尻すぼみに終わった後も、幻滅の七〇年代を左翼として生き続けたトムソンにとっては、ロマン主義者の中で、革命が変容して当初の夢を失った後も、革命、自由平等の理想を求める側に踏みとどまり続けた文学者、たとえば、ウィリアム・ハズリット William Hazlitt (一七七八一—一八三〇) に肩入れするのは必然だったと思われる。^{*13}しかしロマン主義者は長生きした場合、若い頃の情熱、熱狂の反動から保守化するという宿命を一般的に背負っている。そうならなかったイギリス・ロマン主義者は、世俗を全く超越して六十九歳まで孤高の人生を歩み続けたウィリアム・ブレイク William Blake (一七五七—一八二七) や、わずか二十九歳で異国の海に命を散らしたために保守化する暇もなかったパーシー・ビッシュ・シェリー Percy Bysshe Shelley (一七九二—一八二二) などに限られてしまう。先の引用に明らかのように、転向してもそれを自分なりにしっかりと捉え直して認めるか、転向するにしても掌を返すようにするのではなく、反省のための冷却期間を置くかする必要があると考えるトムソンの目には、コールリッジはそのような転向に必要な手続きのどちらも取ろうとしなかった不届き者として映らない。

*13 ハズリットはイギリス・ロマン主義時代を代表する批評家・散文作家。年長のコールリッジと個人的な知り合いで敬意を懐いていたが、コールリッジが政治的に転向したことで後に激しく非難した。比較的若い没年まで反体制派を貫いたハズリットを、トムソンはコールリッジよりもはるかに偉大な政治思想家でありエッセイストであると称讚してゐる。Thompson 154-55 を参照。

本稿では、快刀乱麻を断つが如く、鮮やかにして苛烈なトムソンの筆致に魅惑され、一緒になってコールリッジの政治思想家としての変節を指弾するという道は避け、革命への期待の反動としてある種の内面化、内向が起こり、その結果、社会と政治から離反するだけではなく、急進的だった時代への反動から、正反対の側に反転する傾向があることを確認しておくに留める。^{*14} ロマン主義者の中でも、とりわけ若年期の親フランス革命活動が派手だったコールリッジに付きまといて離れない政治的転向の問題については、いずれ稿を新たに論じることとして、以下では、そのような政治的な揺れを記事として書き続けたジャーナリストとしてのコールリッジの活動を概観した上で、同時平行で詩も書いていたということに注目し、そこから見えてくるものについて考えたい。

『夜警』の発行 一七九七年から二十年以上に及ぶ二つの新聞への寄稿については簡単に触れたが、コールリッジのジャーナリストとしての活動、定期刊行物との関わりはこれに留まらない。それ以前、まだこの詩人がフランス革命への共感に燃え上がった時代には、主に非国教徒の急進派に向けて、自分の政治的な意見を述べる定期刊行物『夜警』*The Watchman* を自家出版している。やはり前に触れたポリンゲン版全集

*14 ロマン主義が政治的希望の後の失望、内向を経て、反動化する道程については、Patrick J. Keane 192-93 が参考になる。

*15 *The Watchman* 375.1) の箇所は、旧約聖書『詩篇』

にすべてが集められている。これは、出版の財政的基盤として予約購読者を募るために行なった、イングランド中部地方から北部地方への講演旅行が長引いたことが原因で、当初の予定より遅れて一七九六年三月一日に第一号が出た後、週刊行物に対して課される印紙税という、政府の経済的言論統制に抵抗するために、八日に一回という変則的かつ反体制的な形で刊行された。しかし、最初一〇〇〇名ほどいたと推測される定期購読者が途中で半減したなどの理由から、財政的な事情が悪化して続行不可能となり、五月十三日、わずか十号目にして、「ああ 夜警よ！ 汝の見張りは無駄に終われり！」¹⁵ 'O Watchman! thou hast watched in vain!' という悲痛な叫びとともに廃刊の憂き目を見た。

コールリッジは、後に批評的散文の代表作となる『文学的自叙伝』*Biographia Literaria* (一八一七)の中で、この時の経験を自家出版の悲惨さを示す例として回顧している。当時の自分の政治的な立場はジャコバン派でも民主主義でもなかったと弁明しつつ先述の講演旅行を回想し、企てが失敗に至った経緯を徹底的に戯画化して描き、売れ残ったこの新聞を女中が炊きつけとして威勢よく燃やしたという落ちまで付けている。そこには、保守化した後半生から当時を振り返って、この出版自体を若気の至りとして茶化したいという意図が透けて見えている。¹⁶ しかし、実態は『文学的自叙伝』

一二七章一節の「主が町を守られるのでなければ、／守る者のさめているのはむなし。」(訳は口語訳聖書による)を下敷きにして、引用後半部は欽定訳聖書では、*'the watchman waketh but in vain'* となっており、コールリッジの嘆きの文にきわめて似ている。また、『エゼキエル書』三章一七節と三三章七節で、神が預言者エゼキエルにイスラエルの家を見守る人になるようにとの言葉を与えている。聖書への引喩から、コールリッジがこの自家出版の定期行物にいかにか大きな使命感をもって臨んでいたかが分かる。

*16 *Biographia Literaria* 1179-87を参照。

での回想とは明らかに異なっている。この出版は、政治的に最も急進的だった時代のコールリッジの声が聞こえるジャーナリズム活動であり、小ピット率^{*17}いるイギリス政府への反発と、究極の正義をもたらすためにフランスが今の窮地をいずれ脱するといふ期待に貫かれている。とはいえ、まだ詩人として飛躍する一歩手前の時代だったこともあり、文学とジャーナリズムの関わりというところで言えば、主に政治的な発言をすることに眼目があった。そのため、少なからぬ数を掲載することになった自作の詩に対しても、全集版『夜警』の编者ルイス・パットン Lewis Patton の指摘する通り、政治的な主張を明らかにするという、非常に公的な役割を求めているように思われる。^{*18}

『モーニング・ポスト』、『クエリア』への寄稿 それに対して、『モーニング・ポスト』と『クエリア』への寄稿時代、特に『モーニング・ポスト』へ寄稿していた時代は、コールリッジの詩人としての全盛期とも重なっている。この時期には、政治的な見解が自己の中で分裂を来たし始めたことも相まって、詩が単に自分の公的な見解を述べるための道具から、私的な発言、自分の内面の開拓へと向かっていく傾向が見られる。『夜警』時代の政治的な、公的な内容の詩が全く姿を消すわけではないものの、この時期の詩作の中心を占めるのは、超自然的な物語詩か、あるいは、自然の中での静かな個

*17 ウィリアム・ピット William Pitt (一七五九—一八〇六) は、トリー党の政治家として一七八三年、若くして首相に選ばれると、二度にわたってこの職を務め、革命フランスとの戦争の前半を主導した。急進派時代のコールリッジから目の敵にされた。フランスとの植民地七年戦争の時に首相を務めた同名の父親と区別するため、父大ピットに対して小ピットと通称される。

*18 The Watchman xvii を参照。



図版2 1798/9年 20代半ばのコールリッジの肖像画

1798年から翌年にかけてのドイツ滞在時に未詳の画家によって描かれた肖像画。この当時コールリッジは26歳で、『モーニング・ポスト』への寄稿を本格化していく時期に当たっており、若々しさに溢れている。パステルの原画は詩人の経済的庇護者だった二代目ジョサイア・ウェッジウッド Josiah Wedgwood (1769-1843) に贈られたがその後の消息は不明で、現在残っているのは個人所蔵の複写。肖像画についての情報はこの図版の出典ともなった Paley 23-26 を参照。

人的な瞑想を描く私的な詩のいずれかだった。つまり、いずれも一見すると政治性から離れた詩だったのである。

政治的な主張ばかりでなく、詩的な創作行為にも変容の見られるこの時代が、コールリッジの文学とジャーナリズムの交錯を考える上では、最も興味深い。アードマンが、『モーニング・ポスト』以前、ケンブリッジの大学時代に、『ケンブリッジ・インテリジェンサー』*The Cambridge Intelligencer*、大学を中退してからは『モーニング・クロニクル』*The Morning Chronicle*にも寄稿しているにも関わらず、三巻本には『モーニング・ポスト』と『クローリア』の記事だけを収録したのも、間接的にそれを裏づけているかもしれない。この時代については、ジャーナリズム活動の概観を終えた後で、もう一度詩作活動との関わりにおいて詳しく論じたい。

『友』の発行 『友』*The Friend*は、一八〇九年六月一日から一八一〇年三月十五日まで二十七号続いたやはり自家出版の定期刊行物である。『夜警』と同じように、自分と志を同じくする人々と意見の交換をしたいという思いは変わらなかつたようだ。しかし、ここでのコールリッジは、いわゆる転向を済ませて既に保守化しており、対象とする読者層も、『夜警』の時と違って、急進的な非国教徒ではなかつた。また詩を

ほぼ諦めた時代でもある。コールリッジが公に、「自分の本性に合わない哲学研究を続けたために、自分の生来の詩的な才能が枯渇した」と、いわば詩の断念を宣言したのは、一八〇二年十月四日『モーニング・ポスト』に寄稿した「失意のオード」*Dejection: An Ode* においてだった。この時期以後、全く詩を書かなくなったわけではなく、ノートなどに詩の断片を書いていて、それが掘り起こされて死後の詩集に収録されてはいない。しかし、詩の重要度は明らかにコールリッジの中で落ちてゆき、『友』の発行される一八一〇年前後には、もはや詩作活動とジャーナリズム活動の間に緊張関係はなくなっていると言わざるを得ない。

詩人としての最盛期における詩の発表媒体 コールリッジの詩人としての絶頂期は一七九七年から一七九八年にかけてであり、先述の通り、一八〇二年には詩的才能の枯渇を宣言している。奇しくも、『モーニング・ポスト』への寄稿は一七九七年十二月七日号に始まって、一八〇三年八月二十日号で終わっており、詩人としての最盛から終焉の時期と記事執筆の時期が不思議に重なっている。^{*19} あれほど積極的にも含めて寄稿していた事実から、この詩人の代表作の多くが『モーニング・ポスト』に掲載されて世に出たはずだという予測が出てきても無理はない。しかし、『モーニング・ポ

*19 一七九七年十二月七日の最初の寄稿は「不幸せな女性に捧ぐ」*To an Unfortunate Woman* という詩だった。散文記事の寄稿は一七九八年一月二日が初めてでアードマンに収録されているのはここから。後述するように活躍の場を『クローリア』に移したため、一八〇三年八月二十日号で記事の寄稿は終わり、アードマンにはここまでしか収録されておらず、詩の掲載も同じ年の五月十二日号で終了している。しかし、なぜか突然一八〇六年九月二十六日と一八〇七年三月三十一日に、二人の政治家小ピットとジェ

イムズ・フォックス James Fox を比較して前者を評価する姉妹詩のようなものを掲載している。これは既に『モーニン

スト』寄稿時代以前のものも含めてコールリッジの代表作と見なせる十三の詩の初出発表媒体を、推定されている執筆順にまとめた以下の一覧表を見ると、興味深い事実が浮かんでくる。一覧には、タイトルと、全集版詩集の编者 J・C・C・メイズ J・C・Mays による執筆（改訂も含む）推定年月、および初出媒体とその年月を記した。

	詩の題名	推定執筆年月	初出媒体（発行年月日）
1	『宗教的瞑想』 <i>Religious Musings</i>	一七九四年十二月二十四日— 一七九六年三月二十八日； 一七九七年—七月	『様々な主題についての詩集』 <i>Poems on Various Subjects</i> （一七九六年四月） ^{*20}
2	『アイオロスの竖琴』 <i>'The Eolian Harp'</i>	一七九五年八月十月と 一七九六年二月	『様々な主題についての詩集』 <i>Poems on Various Subjects</i> （一七九六年四月）
3	『隠遁の地を後にしたことに （この）の瞑想』 <i>'Reflections on Having Left the Place of Retirement'</i>	一七九六年三—四月	『月刊雑誌』 <i>The Monthly Magazine</i> （一七九六年十月号）
4	『諸国民の運命』 <i>The Destiny of Nations</i>	一七九五年五—九月； 一七九六年十月—一七九七年 一月；改訂一八一五年	『シムラの言の葉』 <i>Sibylline Leaves</i> （一八一七年七月） ^{*21}

グ・ポスト』の執筆陣から離れた後、特殊事情により生じた寄稿と判断して主要執筆期間から外して考えた。

*20 『夜警』第二号（一七九六年三月九日）に二七九—三七八行、第四号（一七九六年三月二十五日）に二二—四四行が抄録されているが、全体の初出はこの詩集。

*21 最初の草稿は一七九五年の初夏から秋に書かれ、一七九六年に出版されたロバート・サウジー Robert Southey 作『叙事詩ジャンヌ・ダルク』*Jean of Arc, An Epic Poem* の第二巻として四五〇行ほどが掲載された。その後、その寄稿分の続編を一五〇行ほど書いた。友人チャールズ・

5	「この菩提樹の木陰はわが牢獄」 『This Lime-Tree Bower My Prison』	一七九七年七月	『年次詞華集』 <i>Annual Anthology</i> (一八〇〇年) ^{*22}
6	『老水夫の歌』 <i>The Rime of the Ancient Mariner</i>	一七九七年十一月—一七九八年三月二十三日	『抒情的歌謡集』 <i>Lyrical Ballads</i> (ワーズワスとの共作、匿名で一七九八年九月に出版)
7	『深夜の霜』 『Frost at Midnight』	一七九八年二月	一七九八年に出版された四つ折判小冊子 ^{*23}
8	『フランス頌』 『France: An Ode』	一七九八年三—四月	『モーニング・ポスト』 (一七九八年四月十六日号) ^{*24}
9	『孤独の中の不安』 『Fears in Solitude』	一七九八年四月	一七九八年に出版された四つ折判小冊子 ^{*25}
10	『クリスタベル』 <i>Christabel</i>	一七九八年二—四月； 一八〇〇年八—十月	八つ折判小冊子 (一八一六年五月) ^{*26}
11	『忽必烈汗』 『Kubla Khan』	一七九七年九—十一月； 一七九八年五月—一七九九年十月	八つ折判小冊子 (一八一六年五月) [*]
12	『小夜鳴鶯』 『The Nightingale』	一七九八年四—五月	『抒情的歌謡集』 <i>Lyrical Ballads</i> (一七九八年九月) [*]

ラム Charles Lamb の批判を受けてそれ以上書く気をなくしたものの、再び自信を取り戻して、その一五〇行分を『モーニング・ポスト』一七九七年十二月二十六日号に掲載した。一八一四年になってこの旧作に関心を示し、新しいタイトルをつけて詩集『シビラの言の葉』に収録した。

*22 この初出媒体は*21にも名前が挙がった友人で、義理の弟に当たる詩人ロバート・サウジーが同時代の詩を集めて、一七九九年、一八〇〇年の二度に渡って出した詩選集。

*23 以下の8、9と一緒。小冊子の発行月是不詳だが、この年の末近くだったと推定されている。Purton 36を参照。

『モーニング・ポスト』掲載詩 この一覧を見ると一目瞭然だが、代表作の初出媒体

のほとんどが『モーニング・ポスト』などの定期刊行物ではない。アードマンの集めた記事に詩だけの寄稿は含まれていないが、コールリッジの全詩集を見ると、この時期『モーニング・ポスト』にかなりの数の詩を初出として掲載している。^{*27} 8の改題改

訂版、9の一部が再録として掲載されたのも数えると、一七九七年—4、一七九八年—12、一七九九年—23、一八〇〇年—8、一八〇一年—13、一八〇二年—33、一八〇三年—1、一八〇六年—1、一八〇七年—1、合計で96もの詩が掲載されている。一八〇三年『クーリア』に移籍した後は、例外的な最後の二回を除くと、詩の寄稿もなくなっ

ている。^{*28} 因みに、『クーリア』時代には、コールリッジの詩作活動自体が大幅に減少

したことを反映して、他紙や自分の詩集に発表したものの再録が『モーニング・ポスト』から移籍する以前に一八〇〇年—1、一八〇一年—3、一八〇二年—1あるほか

は、一八〇四年—1、一八〇六年—2、一八〇七年—1、一八〇九年—2、一八一一年—5(そのうち一つは他紙初出の再録)、一八一二年—1(他紙初出の再録)、一八一四年—2、

*24 初出時のタイトルは「取り消し頌」‘Recantation: An Ode’。直後にタイトルを変え、改訂を加えて7、9と一緒に四つ折判小冊子に収めて再出版。さらに改訂して『モーニング・ポスト』一八〇二年十月十四日号に掲載。前掲の図版1—1、1—2を参照。

*25 一二九—九七行は、8の改訂版と一緒に『モーニング・ポスト』(一八〇二年十月十四日号)に掲載。

*26 11及び代表作には挙げしていない「眠りの苦しみ」‘The Pains of Sleep’と一緒に出版。

*27 アードマンは三巻目の巻末付録Dの記事とは独立して『モーニング・ポスト』と



図版3 1814年40代初めのコールリッジの肖像画

コールリッジは、1804年からマルタ島に滞在していた。その折に訪れたローマで1806年に知り合ったアメリカ人画家ウォシントン・オールストン Washington Allston (1799-1843) に、ブリストルで再会した1814年に描いてもらった肖像画。図版2から15年ほど後、まだ40歳をわずかに越えたばかりだが、この間にワーズワスとの不和（後に和解）、家族を離れての放浪生活など人生のどん底の時期を過ごしたため、随分と老け込み既に髪の毛は真っ白になっている。1818年まで続く『クーリア』寄稿時代の後期に当たり、この詩人の肖像画のうちで最も有名なもの。油彩の原画はロンドンの国立肖像画美術館所蔵。肖像画についての情報はこの図版の出典ともなった Paley 53-60 を参照。

一八一八年―と、散発的にしか詩を寄稿していない。

『モーニング・ポスト』によつて世に出た詩を読むと、一七九七年から一八〇〇年くらいまでは、政治的な内容の詩がほとんどである。途中、一七九八年九月から翌年七月までのドイツ滞在時、ホーム・シックに駆られて書いた二編の詩「イギリスの若僧の軍歌」『The British Stripling's War-Song』と「ハルツの森にあるエルビングゲローデの宿帳に書いた詩行」『Lines: Written in the Album at Elbingerde, in the Hartz Forest』が愛国的な思いを吐露しているほかは、一七九八年一月八日に掲載した「火事、飢饉、虐殺」『Fire, Famine, and Slaughter』で激烈なピット内閣批判を展開し、一七九九年に至つても、「昏睡者と狂人」『The Lechargist and Madman』ほかほとんどの詩はまだ反体制的姿勢で、自由の大義を歌い、反戦を唱えている。一八〇〇年でさえもまだ、「タレーランからグレンヴィル卿へ」『Talleyrand to Lord Grenville』「推定上の息子についての寸鉄詩」『Epigram on a Supposed Son』などには小ピット内閣を揶揄する反政府的姿勢が見られる。しかし、さすがに一八〇一年になると、十二月四日に掲載した「静けさに捧げる頌歌」『Ode to Tranquility』で自分の激動の青春時代を振り返つて、既に静寂の中に生きる決意をしたことが述べられており、急進派の時代が終わりを告げたことがはっきり分かる。それ以後も詩の寄稿は続けられるものの、妻ならぬ女性への思いを綴る恋愛詩、ドイツで

『クーリア』寄稿された詩のタイトルと掲載号の一覧を載せているが、詩そのものは掲載していない。本稿では、無署名、変名などで掲載された詩の著者推定に関して、出版年が四半世紀近く新しいメイズの全集版詩集に拠つたため、アードマンとは異なっている点もある。

* 28 落ち穂拾いのような最後の二回の『モーニング・ポスト』への寄稿の扱いについては*20参照。メイズはこの二つを同じ主題の一つの詩と見なしているが、二度に分けて掲載しているので、ここでは別々の詩として扱っている。

採集した詩の翻案など、個人的なものが増えて、公的な内容のものは次第に影が薄くなる傾向がある。

コールリッジによる詩の発表媒体の分別 先に代表作として挙げた作品のうち、ジャンヌ・ダルクが見る神秘的なヴィジョンに託して、苦悶の現世から革命によって自由平等の未来を予兆する未完の預言的物語詩『諸国民の運命』の三分の一ほどの抄録を除くと、『モーニング・ポスト』に完全な形で初出したものは、共和国として長い伝統をもつスイスへ、一七九八年二月に侵略を開始した革命フランスに対する支持取り消しを歌った非常に公的な政治詩「フランス頌」^{オード}と、自分の詩的な才能の枯渇を宣言する「失意のオード」の二つにすぎない。もちろん、『老水夫の歌』のような六〇〇行を越える長編詩は新聞に載せたくても載せてもらえないという物理的な事情があったにせよ、執筆からそれほど時間を経ないでほぼ完全な形で公にされた長編詩は、初期の『宗教的瞑想』を除くとこれだけだった。詩人自身が未完成と考え、心理的な理由から公にするのを憚ったと思われるもう一つの長篇詩『クリスタベル』は、阿片を飲んで眠りに落ちた夢の中で見た光景を、眠りから覚めた後にそのまま書き付けたという、ほとんど意味と無意味の瀬戸際に立つような短篇詩「忽必烈汗」^{クブラ・カーン}とともに、

一八一六年に小冊子に収められるまで、二十年近くも目の目を見なかった。

ジャーナリズムへの記事が、ともすれば書き捨てになつて短命であることを早くから意識していたコールリッジは、新聞という速報性を第一とするメディアに相應しい作品と、そうでないものを区別して発表していた可能性がある。少なくとも政治的な急進性を失わず、新聞をその窓口にしようとしていた十八世紀の間は、政治的な主張を旬のうちにできるだけ多くの人々に伝えたい時には躊躇せず新聞に載せ、一方、政治的メッセージが希薄で、個人的な内容のものは、もつと永続性のある書籍形態の詩集で最初から発表するとうように、発表媒体を使い分けていたと推測される。詩の内容によつて相應しい発表媒体は異なると詩人が考えていた可能性については、上記7、8、9を収めた四つ折判小冊子が一九八九年に復刻出版された際に、ジョン・ワーズワス Jonathan Wordsworth がつけた序文の解説が大いに参考になる。それによれば、コールリッジ最大の傑作が含まれるワーズワスとの共作詩集『抒情的歌謡集』を匿名で出版したのは、急進的の革命支持派として悪名高かったコールリッジの名を出すことで一般読者を失う危険を避けることを目的としていたのに対し、小冊子では、収められた三作品のうち二つがあからさまに政治的な内容である上に、出版者ジョゼフ・ジョンソン Joseph Johnson (一七三八一—一八〇九) も名うての急進派、読者も当然革命

支持の同調者だけを予定していたので匿名にする必要はなかったということである。^{*29}

こうしてみると、執筆から時を経ての抄録とはいえ、政治的なヴィジョンを高らかに謳う『諸国民の運命』や、政治性が強く、自分のフランス革命への心変わりをはつきり打ち出している「フランス頌」^{ナポレオン}を『モーニング・ポスト』にまず載せたかった気持ちは理解できる。革命フランスへの支持撤回を訴える、言わば、転向の第一歩を記す重要な作品だが、政治的な態度の表明には変わりがない。コールリッジは、一刻も早く今後の自分の進路への布石を打った方がよいと考えたのかもしれない。『モーニング・ポスト』に寄稿を始める以前に別の雑誌に掲載した「瞑想」も、新婚生活を送るためにイングランド西部のひなびた町にしばらく暮らした後、当時コールリッジにとって政治活動の拠点だったプリストルに戻って、人類の幸福のために再び頑張るという公的な宣言をする詩である。したがって、活動家としての自分の復活を同志たちに素早く知らせたいと考えて、書籍ではなく、月刊雑誌への掲載を選んだと理解できる。

「失意のオード」の『モーニング・ポスト』掲載理由 「失意のオード」はもつと私的な内容であるが、先に概観した通り、この詩の書かれる一八〇二年には急進的な情熱はコールリッジからほとんど失われており、新聞へ寄稿する詩自体からも政治性が希

* 29 小冊子復刻版の出版元は Oxford: Woodstock Book 序文にページ番号は付されていない。出版形態へのコールリッジの鋭敏な意識は『夜警』の内容見本にも既に窺うことができる。定期刊行物は読み捨てられることが弱点だと考え、各号に通し番号を付け、年末に製本すれば、年次目録のように利用できるのを購読者獲得の「売り物」にしたのである。The Watchman を参照。

薄になり、代わりに私的な性格を強めている。しかし、このように個人的な内容の詩であつても、あるいはむしろ、それだからこそ、公的な媒体に載せる際には細心の予防措置を施していることが、詩の成立過程を辿ってみれば確認できる。最初この詩の原型は、詩人が思いを寄せていた妻ならぬ女性セアラ・ハッチンソン Sara Hutchinson (二七七五—一八三五) への書簡体詩で、自分の不幸の原因を探り、相手の幸せを求めるといふ極めて私的な性格を帯びていた。そこから、家庭の不幸などあまりに個人的な要素を大幅に削り、自分の詩的才能の衰えを嘆く主題に一本化した。しかも、その発表に際しては、これから結婚するワーズワスの式当日であると同時に、自分のうまうまいなくなつた結婚の七周年とも重なる劇的な日をあえて選ぶというお膳立てをして掲載した。そのために、私的にすぎる二〇〇行の削除だけでなく、語りかける相手を恋する婦人セアラから、ワーズワスという男性に変える必要があると考えたことは、コールリッジが新聞という媒体の公的な性格をどれほど意識していたかを裏づけている。

しかし、なぜ「フランス頌」^{オライド}などに比べれば、どれほど改訂したとしても根本的に私的な性格の拭い去れない詩を、新聞に載せることを選んだのだろうか。コールリッジはこの時期には既に、新聞に掲載して多くの同調者にすぐに伝えたいという政治的な内容の詩は書かなくなっている。したがって、これは新聞、あれは詩集などと分

別する必要もなく、スチュアートの求めに応じて私的な内容のものも寄稿していたという事情がある。しかしながら、もつと明るい内容の恋愛詩ならともかく、詩的才能が枯渇し人生は思うに任せないという否定的な内容を公にする必要があったのだろうか。友人ワーズワスの結婚式のお祝いとしても相応しくはない。一つ推測できるのは、この時点でもう詩を活動の第一としては考えないと公に宣言することが、人生を楽にするという思いがあつた可能性である。コールリッジは巧みな弁舌によつて多くの人を惹きつけ、経済的な援助などを引き出す天才だつた。あの磁器で有名なウエッジウッドの創業者の二代目も、若い頃の急進的なコールリッジの弁舌に惚れて、相当額の年金を提供しているほどだ。そして後援者たちに向かつて、大風呂敷を広げてみせる。これについても書くし、あれについても書くと期待させて、しかし、結局いつになつても書けずに悩むということを繰り返した。もはや詩の面でそうしたことを期待するのはやめてくれ、とこれまでの支持者に示して理解してもらい、肩の荷を降ろしたかつたのではないか。あるいは、もう一つの理由としては、いよいよ気持ちの離れてゆく妻に向けて、たとえ私的な行の多くを削つても家庭生活への不満の隠し切れない詩を公にすることで、「俺はもうこの結婚生活にはうんざりだ」と宣言したかつたとも考えられる。

この詩を掲載してから一年半後の一八〇四年四月、コールリッジは、保険をかけて自分が帰ってこないことになってもいいよう手配した上で、当時地中海の覇権を相争うフランスとの最前線であったマルタ島へ、阿片中毒の転地療養と称して単身で二年間出かける^{*30}。それより二年前、この詩を書いた時点で明確に意識していたかどうかは別として、イギリスからの国外脱出の前触れともなっている。その点でも、自分の周囲の多くが読んでいたこの新聞に掲載することは、意味がないことではなかったと思われる。

政治的立場の移行と詩作活動 詩人としての最盛期の代表作の発表媒体から、何が考察できるかを論じてきた。この時期のコールリッジの公的な政治的発言に目を向けると、アードマンが先にあげた序文で詳細に指摘している通り、ある時期に野党寄りだったと思うと、次には政府寄りになったり、ナポレオンの力に敬意を払うかと思うと、すぐにナポレオンを否定したりというように相当の揺れが出始めている。そのように揺れ動く自分の心を見据えるというよりもむしろ、そこから逃避して冥想、あるいは超自然の世界に入っていくために、私的な会話体の詩、あるいは現実生活を脱却した超自然の物語詩を書いているとも考えられる。

* 30 マルタ出発の一年近く前の一八〇三年五月には、すでに、保険に加入し、その受取人は妻、妻の死後は娘というような段取りを友人宛書簡で述べている (Lattin 1945)。また出航直前の一八〇四年三月には、年に一〇〇ポンドの銀行預金引き出し権を確保したから金の心配はしなくてよいと伝える手紙を妻に出している (Lattin 11109)。Holmes, Early Visions 358-59 も参照。

しかし、現実からの逃避願望が色濃く出ているように感じられることもあって、純粹に文学的な観点からのみ考えられてきたこの時期の会話体瞑想詩や超自然詩が、もう一方で続けられていた公的な作家としてのコールリッジのジャーナリズム活動を考慮に入れると、きな臭さを帯びてくる。コールリッジのジャーナリズム活動に注目する場合、アードマンのように何らかの形で政治的に強い思い入れがある人は、詩の解釈の領域には深く踏み込まず、記事を政治思想家としての意思表示としてのみ考えようとする。反対に、詩を中心に読む人は、どうしてもそうしたジャーナリストとしての公的な活動とその成果について、特になくとも困らない背景のように見落としがちだという傾向が、とりわけ日本では続いているように思われる。コールリッジという作家の全体像を、今までよりも立体的に浮かび上がらせようとすれば、この二つの側面を一層緊密に結びつけて考える必要があるのではないだろうか。

会話体詩の静謐さの再検討 幼いわが子が傍らで眠る中、深夜に一人瞑想に入り、自分の幼年時代を思い出し、それをわが子に会話として語りかけるといふ、会話体詩 *Conversation Poems* というジャンルの代表作「深夜の霜」は、私的な作品の極致であり、政治性は欠落しているかのように読まれており、その回帰的構造の芸術的なまでの完

壁さが称讚されてきた。

しかし、この時期コールリッジがフランスの変化をめぐって、自らの態度についても思い悩み、アードマンが指摘するように政治的に揺れながら新聞記事を書いていたという状況を考えると、深夜一人物思いに耽る語り手コールリッジの脳裏にそうした時事的な問題が過ぎ^よっていたことは間違いない。そもそも深夜に一人眠れず、あれこれ思いを馳せているその原因に、世情の混乱があるのかもしれないと思われてくる。そして、幼くして父を亡くしたために早く大都会ロンドンの寄宿学校へ送られた孤独な少年時代を嘆いて、隣で眠るわが子は自然の中で成長させたいと願って終わる。ここには自分のこれまでの人生への悔いが色濃く表われている。自分はロンドンに育ち、ケンブリッジへ進み、フランス革命をめぐる騒乱に巻き込まれてしまったが、もつと安全な場所で生きればよかったという願望を、政治的転向を公にしていけないこの時点で大っぴらに口にすることはできないので、わが子に託して語っている可能性もあるように思える。

あるいは、もつと端的に、極寒の二月に霜が降りる中で、話し相手もなく、一人物思いに耽る状況そのものが、急進派としての烙印を押されて生きる苦しさを象徴しているのかもしれない。この詩が執筆されたのと同時期に、フランスはスイスへ侵攻し、

さらにはその後、イギリスへも侵攻するとの噂が飛び交ったため、ピット内閣は、国内の革命支持勢力がそれに呼応して反乱が起こることを恐れて、反体制派への弾圧をいよいよ強めつつあった。名うての急進派詩人にとつてはまさに冬の時代であった。

政治性が希薄であると考えられてきたこの作品が、「孤独の中の不安」というフランスによるイギリス侵攻への怯えを描いた詩と、既に加えた「フランス頌」と一緒に小冊子の形で出版されたという事実も、コールリッジがこの詩を政治性と切り離して考えていなかった間接的な証拠となるはずである。

超自然詩の現実性 コールリッジの代表作『老水夫の歌』の主人公の水夫は、阿呆鳥を何の理由もなく射殺したために、その後の航海で苦難に遭い、鳥の殺害者である自分を除く全乗組員が死に絶えるが、その後、汚らわしいはずの海蛇を美しいと讚美したことから呪いが解けて、一人故郷に帰ったものの、日常世界に復帰することは出来ず、その恐怖の物語を語るために、世界を夜のように放浪しなければならない。この作品はどちらかといえば超越的な見地から、宗教的、神話的、あるいは文化人類学的な解釈がなされ、例えば、これはキリスト教的な原罪とその償いの物語だというような見方がされてきた。もちろん、政治的な読み方がされなかったわけではない。早く

も一九六〇年代にウィリアム・エンブソン William Empson が驚くべき明察をもって、この詩はヨーロッパによる地理上の発見と勢力拡大の過程を象徴的に描いたものだと指摘して衝撃を与えた。また、それを受け継いで、さらに対象を特定して老水夫の乗り組んだ船は奴隷貿易船だったと主張した J・R・エバットソン J. R. Ebbatson のような批評家もいた。ほかにこの詩と奴隷貿易との関わりを述べた論文はある。^{*31} 確かにこの時期のコールリッジは熱心な奴隷貿易反対論者であり、それがこの詩に投影されている可能性は否定できない。

しかし、奴隷貿易反対運動以上に、この詩とつなげて考えるべき政治状況は、やはりフランス革命である。一七九八年二月、ちょうどこの詩を書いている時期に、フランスによるスイス侵攻が起こり、イギリスの革命支持者たちを動揺させたことは既に述べた。それにより、革命への懐疑が芽生え、既に今後の政治的転向を詩人が見据えていた可能性があると考えると、フランス革命を熱烈に支持したことが、鳥を殺す行為に喩えられ、それ以後は強まる政府の弾圧下で苦しさを増していく革命支持についての寓話になっていると読んでも、あながち的外れではないように思われる。パトリック・J・キーン Patrick J. Keane が試みているように政治的寓話として物語全体を一貫させようとすると無理が生じるが、革命派として生きる苦しみ折々の表現に垣間見

* 31 マルコム・ウエア

Malcolm Ware は、非常に早い時期に短い論文ながら、この詩の途中で姿を見せる幽霊船が奴隷貿易船であると示唆している。それを受けてクリス・ルベンステイン Chris Rubenstein は、主人公である水夫自身が過去に奴隷貿易船に乗り組んだ経験があり、それに対して罪悪感を懐いているとする。ピーター・キートン Peter Keaton は、正編、続編とも言うべき二つの論文で、水夫が阿呆鳥を撃ち殺した罪が、フランス革命を押し潰そうとし、十八世紀を通じて奴隷貿易を推進し続けたイギリスの二つの集団的な罪を象徴し、水夫の乗り組んだ船は、ピットの抑圧的で、非人道的なイギリス全体を指すと

られる。^{* 32} 一番悪いことをした犯人だけが生き残り、生き残ることは苦痛だとしても、周りは皆死に、死に際に激しい恨みの目を向けたというのは、牧師の家に生まれながら急進的政治活動に走ったことに対して親類縁者を含む保守層から浴びせられた白眼視を想起させる。また、それだけでなく、やがて政治的に転向した裏切り者に対して向けられる、かつての同志からの冷たい眼差しを予兆したものではなかったか。あるいは、そうした光景を阿片の夢の中ですでに見ていたとは考えられないだろうか。トムソンは、コールリッジの場合陸地に戻ってからの、つまり転向してからの償いが足りない、いや、ほとんどないと批判した。しかし、この老水夫の精神状態をその後の人生でもコールリッジが引きずっていたのだとすれば、どうだろうか。故郷へ辿り着きながらも結局「夜の如く地から地へと過り」*'I pass, like night, from land to land'*（『老水夫の歌』一八三四年版、五八六行）、罪の物語を誰かに語らなければならなかった老水夫になぞらえれば、少なくとも意識下において、コールリッジは転向への罪悪感から一生免れることはなかったように思われる。詩人としては詩に託された象徴的償いで許されても、政治思想家としては別問題で、それを意識化して、トムソンの言うような浄化の過程を経なければならぬという批判はあるとしても。

考えている。これでは、余りにも水夫個人の肩に背負わされた罪が大きすぎて、捉えどころがなくなり、細部の指摘に示唆的なものはあっても、全体として詩の中の重要な出来事が何を表わしているのか整理がつかなくなっている。

* 32 キーンが提案する政治的寓話としての読みのうち、海蛇の讚美が、それまで革命派だったのを悔いて、反革命派の筆頭ピットへの憎悪を打ち捨てて、体制側に寝返ることだとしている点は瞠目に値する。しかしながら、詩の中の出来事を現実政治に一对一対応させようとすると、どこか滑稽な感じが付きまとうことは否めない。また、少なくともこの詩を執筆している

正典化以前の執筆状況の再構築 このようにコールリッジは詩人と、ジャーナリストとしての活動を同時に行なっていたということを視野に入れるだけで、随分印象が変わってくる。現在、漸くよむやコールリッジ全集とノートブック全集の完結、あるいはブリティッシュ・ライブラリー所蔵のコールリッジ手書き草稿のマイクロ・フィッシュによる刊行を経て、これまで書物の形になつていなかったコールリッジの筆記物への接近が可能になった。それによって、ある種の振り分けの後に出来上がった既存の詩人像に対して何の疑問も懐かずに、ごく限られた数の優れた詩、代表的な批評散文によって、コールリッジを理解しようとすることの危険性が明らかになっている。これまでに取るに足らないとして、評価の歴史的な過程の中で排除されてしまったものを、もう一度執筆を取り巻いていた状況として立ち上らせて、多様な作家活動の総体を捉え直してみると、芸術至上主義を奉ずる一面的な読みを突き崩す可能性があることは、間違いないように思われる。

文学史として整理されてしまう前の雑然とした状況を再構築すること、これをわれわれ研究者の一人ひとりが自分の手で行なう必要がある。今回は、漸く出揃った、ふら節ふらにかける前の資料を用いて、十分な肉付けを行なったとは言い切れない。このよ
うな研究の緒に就いたにすぎない。しかし、歴史状況と文学作品を思いつきにまかせ

時点では、ビット内閣への寝返りは起こっていないという反論も予想される。本稿七八・七九でも指摘したように、コールリッジは、一七九八年のスイス侵攻により革命フランスへの幻滅を味わいながらも、一八〇〇年までは『モーニング・ポスト』紙上でビットに批判的な態度を示し続けるのである。むしろ、孤立、苦悶、沈黙、帰還とその後の世界放浪など、もっと抽象的なイメージに、当時コールリッジが置かれていた革命派としての苦しい境遇がそれとなく宿っているというふう
に、余り特定のにはなくも
う少し間接的に政治性との関
係を漠然と捉える方が効果的
だと思われる。Kean 212-48
を参照。

て結びつけ、政治性の不在こそが政治性の存在を証拠立てるとして、政治を詩の中から抹殺したロマン主義詩人たちの弱みを、仲間内でしか通じない難解な言葉で暴きたてようとする新歴史主義批評 New Historicism 的な虚妄に陥ることなく、文学作品に対して歴史が与える深甚なる影響を理解するために、当時の社会で大きく発展しながらも、媒介として短命であるという宿命を背負っていたために評価されずにこれまで消されていた定期刊行物という分野の考察を続けていけば、最近ただでさえ地位が危うくなっている文学研究を、その陥りやすい一面性と非現実性から多少なりとも救い出して、復権へと方向づけられるものと信ずる。

残された課題——反大衆化、「文学」の変容、新聞の全体性 今後取り組むべき課題として、ディアドラ・コールマン Deidre Coleman が示唆しているように、コールリッジ自身が読者に対して懐いていた同志としての過剰な期待が、結局、ジャーナリズム活動との齟齬を来たしたのではないかという問題が挙げられる。^{*33} 結局、コールリッジは大衆を信用することができず、大衆を導く力のある牧師階級に向かって語りかけることを選ばざるを得なくなった。これは大衆化していくジャーナリズムの中にあつては、反主流的な態度であり、そのことがジャーナリストとしてのコールリッジの完全な成

* 33 Coleman 130 を参照。

功を妨げる原因となつたのではないかと予測される。

次に、ポール・キーン Paul Keen が論じた「文学」という概念の変容の問題を、コーリリッジのジャーナリズム活動と詩作活動の關係に、当てはめることができるかどうかという問題がある。今でも Literature には「文獻」という意味があるように、十八世紀末のある時期まで、文学とは日本で言う純文学的な書き物だけではなく、もっと幅広く、哲学その他の書き物もすべて文学として包括的に論じられていた。しかし、ロマン主義の時代に、文学といえば審美的な、現実性から離れた書き物だけを指すようになったという転換をキーンは指摘している。^{*34} コーリリッジの中にも、そのような転換に沿つた態度の変化があつたとすれば、よく書けたと自負している個人的な主題の作品を、単行本などの雑誌や新聞に比べれば短命でない媒体に発表しようとした態度を促した動きとして考えられるのではないか。

さらに、マーク・パーカー Mark Parker は、寄稿者たる作家と、寄稿した新聞や雑誌媒体全体の記事との相互作用、編集者の意図と寄稿者の対立を考えて、ジャーナリズムとの関わりを立体的に構築することを提起している。^{*35} この作業は、振り返ってみると、既に紹介したアードマンがかなりの程度行なっているものの、さらに、詩作活動との関わりに特段の注意を払いながら、これを推し進める必要があると思われる。

* 34 Keen 1-131 を参照。

* 35 Parker 1-29 を参照。

ただ、そのためには、アードマンの集めた『モーニング・ポスト』や『クーリア』に載ったコールリッジによる記事だけでは足りず、それが掲載された新聞全体を読む（これは現時点では基本的にイギリスに行かなければ閲読できない上に、イギリスでも必ずしもすべての号が容易に読めるような状況ではない）という、途方もない労苦を覚悟しなければならぬ。しかし、それは、正典として残った最上の詩だけを讀んで事足りりとする、どこか偏った文学研究から、出版当時の資料に当たって、ふさい篩にかけられ正典化されてしまう前の混沌とした、エネルギーに満ちた作家活動を浮かび上がらせて、人文資料学の構築に向けて何らかの寄与しうるとすれば、報われない労苦ではないように思われる。

保守反動的な『クーリア』への寄稿 最後に、アードマンの記事集の後半を構成していながら、本稿では詳しく触れられなかった『クーリア』（図版4参照）について少し述べておく。

一八〇三年に、コールリッジの記者としての才能を高く買って原稿を依頼していたスチュアートが日刊紙『モーニング・ポスト』を売り、夕刊紙『クーリア』を買収したのに伴って、コールリッジも主な発表の媒体をこちらに移し、一八一八年まで寄稿を続ける。この時代は、すでに代表作を書き終えて詩人としての筆を折り、政治的に

図版 4-1 『クーリア』一八一八年三月三十一日号(二面)

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

『クーリア』も『モーニング・ポスト』と同じく四ページ構成だったが、ここにはそのうち一面と二面を収録した。タイトルの下に、この新聞が日刊の『モーニング・ポスト』と違って夕刊であることが示されている。値段が七ペンスに上がっているのは、印紙税が四ペンスに引き上げられたせいである。印はタイトルの右上に捺されているが、Font という文字は上書きに隠されていて半分しか見えない。値段表示は内訳を示しておらず、政府の印紙税取立てへの毒は消えている。一面はすべて広告で二面の一コラム目の半ば手前まで続く。

図版 4-2 『クーリア』一八一八年三月三十一日号（二面）

ケンブリッジ大学図書館所蔵の資料より引用掲載

二面一コラム目半ばまでの広告に続いて、編集者への呼びかけで始まる書簡体の記事は二コラム目の途中 Plato という署名で締め括られているが、実際に書いたのはコールリッジである。これが『クーリア』への最後の寄稿となり、一七九七年以来続いたダニエル・スチュアートとのジャーナリズム上の長い付き合いもこれで終わる。最終寄稿記事は、木綿工場で悲惨な労働を強いられる子供の救済法案の通過を訴える内容で、*Essays on His Times* II 481-89 に収録されている。

転向を果たす時期に当たる。運悪く、この新聞には既にトマス・ジョージ・ストリー
ト Thomas George Street という実権を握る編集者がいて、『モーニング・ポスト』時代
のように自分で社説まで書くというような自由は利かなかつた。しかも、この編集者
は政府から金を貰つて提灯記事を書くことを生きる糧としており、転向して保守化し
てゆくコールリッジでさえ、とてもついていけない節操のない男だつた。^{*36} 営業面の権
力者スチュアートとの板挟みになつて、執筆活動が思うに任せなかつたはずだが、最
初に引用したド・クインシーの発言には、とりわけ『クীরリア』時代の記事が素晴ら
しいという一節がある。これは例えばトムソンとは真つ向から対立する意見であり、
おそらく、『クীরリア』をド・クインシーが高く買ったのは、この雑誌の保守性、政府
べつたりの姿勢によると考えられる。ド・クインシー自身が、大変な保守反動思想の
持ち主だつたからである。その記事の評価や、スチュアートとの関係がぎくしゃくし
て、お互いに新聞における相手の貢献をできるだけ低く回想しようとする後年が訪れ
ることについては、また別に詳しく論じる機会があるかもしれない。^{*37}

*36 ストリートの内閣の走
狗的態度と、コールリッジと
の対立については、*Essays on
His Times etc.*を参照。

*37 コールリッジが
一八一七年に『文学的自叙伝』
において、『モーニング・ポ
スト』の売れ行き増大への自
分の貢献を過大に回顧したの
に対して、スチュアートが腹
を立てて、一八三八年の自叙
伝でコールリッジの寄与を全
体の百分の一以下と見積もつ
てこれに反撃した (*Essays on His
Times etc.*)。主筆としてのコー
ルリッジが実際にどの程度、
売れ行きに貢献したかについ
て、アードマンは「一七九九
年に本腰を入れて寄稿し始め
る前の発行部数が一五〇〇部
以下、最初の四ヶ月にそれを

二〇〇〇部以上にしたのは、
論説記事を書いたコールリッ
ジの手柄であり、この増加は
相当の数だ」と詩人を擁護す
る註をつけている (*Essays on His*
Times xc-xcvi)。

- Abrams, M. H. gen. ed. *The Norton Anthology of English Literature: The Major Authors Sixth Edition*. New York: W. W. Norton & Company, 1996.
- Altick, Richard D. *The English Common Reader*. Chicago: University of Chicago Press, 1957.
- Aspinall, Arthur. *Politics and the Press, c. 1780-1850*. London: Home and Van Thal, 1949.
- Black, Jeremy. 'The Eighteenth Century British Press'. *The Encyclopedia of the British Press, 1422-1992*. Ed. Dennis Griffiths. London: Macmillan, 1992. 13-23.
- Coleman, Deirdre. 'The Journalist'. *The Cambridge Companion to Coleridge*. Ed. Lucy Newlyn. Cambridge: Cambridge University Press, 2002. 126-41.
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Ernest Hartley Coleridge. 2 vols. Oxford: Oxford at the Clarendon Press, 1912.
- _____. *The Complete Poems*. Ed. William Keach. London: Penguin Books, 1997.
- _____. *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge*. Gen. ed. Kathleen Coburn. 16 vols. (in 34). Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1969-2002.
- _____. *The Warburton*. Ed. Lewis Patton. 1970 = CC, vol. 2.
- _____. *Essays on His Times*. Ed. David V. Erdman. 3 vols. 1978 = CC, vol. 3.
- _____. *The Friend*. Ed. Barbara Rooke. 2 vols. 1969 = CC, vol. 4.
- _____. *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and W. Jackson Bate. 2 vols. 1983 = CC, vol. 7.
- _____. *Poetical Works*. Ed. J. C. C. Mays. 6 vols. 2001 = CC, vol. 16.]
- _____. *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6 vols. Oxford: Oxford at the Clarendon Press,

- 1956-71.
- . *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Kathleen Coburn. 5 vols (in 10). London: Routledge & Kegan Paul, 1957-2002.
- Craven, Louise. 'The Early Newspaper Press in England'. *The Encyclopedia of the British Press, 1422-1992*. Ed. Dennis Griffiths. London: Macmillan, 1992. 1-12.
- De Quincey, Thomas. *Recollections of the Lakes and the Lake Poets*. Ed. David Wright. London: Penguin Books, 1970.
- Ebbatson, J. R. 'Coleridge's Mariner and the Rights of Man'. *Studies in Romanticism* 11 (1972): 171-206.
- Empson, William. 'The Ancient Mariner'. *Critical Quarterly* 6 (1964): 298-319.
- Hindle, Wilfrid. *The Morning Post, 1772-1937*. London: Routledge, 1937.
- Holmes, Richard. *Coleridge: Early Visions*. London: Hodder & Stoughton, 1989.
- . *Coleridge: Darker Reflections*. London: HarperCollins, 1998.
- Keane, Patrick J. *Coleridge's Submerged Politics*. Columbia: University of Missouri Press, 1994.
- Keen, Paul. *The Crisis of Literature in the 1790s: Print Culture and the Public Sphere*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Kirson, Peter J. 'Coleridge, the French Revolution, and "The Ancient Mariner": Collective Guilt and Individual Salvation'. *The Yearbook of English Studies* The French Revolution in Literature and Art Special Number 19 (1989), 197-207.
- . 'Coleridge, The French Revolution and *The Ancient Mariner*: A Reassessment'. *Coleridge Bulletin*, n.s. 7 (Spring 1996): 30-48.
- Klanche, Jon. *The Making of English Reading Audiences, 1790-1832*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1987.
- Parish, Stephen Maxfield, Ed. *Coleridge's Dejection: The Earliest Manuscripts and the Earliest Printings*. Ithaca: Cornell University Press, 1988.

- Parker, Mark. *Literary Magazines and British Romanticism*. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Paley, Morton D. *Portraits of Coleridge*. Oxford: Clarendon Press, 1999.
- Purton, Valerie. *A Coleridge Chronology*. London: Macmillan, 1993.
- Rubenstein, Chris. 'A New Identity for the Mariner? A Further Exploration of "The Rime of The Ancient Mariner"', *Coleridge Bulletin*, n.s. 3 (Winter 1990): 16-29.
- Thompson, E. P. *The Romantics: England in a Revolutionary Age*. New York: The New Press, 1997.
- Ware, Malcolm. 'Coleridge's "Spectre Bark": A Slave Ship?' *Philological Quarterly* 40 (1961): 589-93.
- 『コウルリヂ詩選』 斎藤勇・大和資雄訳、岩波文庫、一九五五年
- 『コウルリヂ詩集』 枝村吉三編註、旺史社、一九八七年
- 『対訳コウルリヂ詩集イギリス詩人選(乙)』 上島建吉編訳、岩波文庫、二〇〇二年
- 『トマス・ド・クインシー著作集IV 湖水地方と湖畔詩人の思い出』 藤卷明訳、国書刊行会、一九九七年
- 『小池銈著作抄』 (松柏社 二〇〇五年) 六九―八八頁「十八世紀のジャーナリズム」